巻頭言

世界史から見た明治時代

小 堀 桂 I 郎

う。この事は誰しものすぐに思ひつき、考へてみたくなる問題である。 社會といふ外からの視點に立つて見るならば、決してその樣に稱揚し贊美してさへゐればよい經歷とは映らないであら それは他ならぬ我が國民自身の旣往であるからこそ眩しく高く聳えて見えるのであつて、これを他者から、 民からすれば、 明治といふ時代は、その歴史を築いた父祖の世代の努力の嚴しさとその輝かしき成功の故に、百年後の平成の御代の ただ只管に仰ぎ見るより他ない、我等末裔の世代には及びもつかぬ名譽と榮光の時代であると映る。 例へば國際 只

たポルトガル人の船團と、 六世紀のいはゆる大航海時代のことだつた。 して、日本列島とその土地に住む日本民族の存在が、西方世界の人間に、 黄金の國ジパングの名を西方に傳へたマルコ・ポーロの『東方見聞錄』(十三世紀末)の例は苦笑と共に一先づ措くと 殊にその船に便乗して東方に布教傳道の新天地を探し求めて來航したイエズス會の宣教師た 情報を傳へたのはアフリカとインドの海を周航して極東の海域 現實に意味のある情報として傳は にやつてき つたのは十

この布教事業の代表者である聖フランシスコ・サヴィエルにせよ、驚くべき浩瀚な『日本史』を著述して當時の日本

治される、 時代に入つてからの宣教師達の通信によつて初めて、 す て斷乎たる排 べき候補地としての土地と民であり、 政 情と民俗を報告したル 確乎たる國家意志を具へた政治的統一體として認識したのであつたが、その時の日本は旣に西方世界に 除的閉鎖的姿勢を示す、近づき難い國家になつてゐた。 イス・ フ П イスにせよ、 關心事は專ら異教徒教化 彼等にとつての日本はどこまでも 西方世界は日本を秀吉、 の可能性であつた。 家康、 秀忠といふ強力な君主によつて統 十七世紀初期 カトリック教會の勢力範 0 は ゆ る大迫 崖 に 入

時の日本民族が成就してゐた秩序の安寧と文化の美的洗練の度合の高さに瞠目し、 約三百年は先んじてゐた。 の際の指標とされる國民の知的道德的成熟の度合から見れば、 それはどこまでも彼等にとつての「異質」であつて、決して客觀的な「先後」の序列關係ではない。よく諸文明 約を締結した時、 紀前半の同じくドイツ人のシーボルトによる地理學・博物學上の新情報が加はつたといふ程度のものにすぎなかつた。 沖に來航した時、 十年に亙つて西方世界の人々の有する日本國と日本人についての知識の根底をなす資料として最も有効であり續け 學者エンゲル して西方世界に傳へる大役を果したのは、 外の世界から内情を窺ふ事の極めて難しい國となつてゐた十七世紀の日本の國情をともかくも信賴できる學術 ・九世紀の半ば、 五年 (一八五八) に先づアメリカと、 ベルト・ケンペ この提督の 此等西方諸國の眼に映つた日本は、 アメリカ東インド艦隊司令官ペリー 故に開國と同時に物珍しさに惹かれて續々と日 胸中に在つた日本についての豫備知識は基本的にはこのケンペ ルである。そしてケンペルの傳へた五代將軍綱吉治下の元祿時代の日本情報が、 長崎オランダ商館の客員として巧みに鎖された日本に潛入したドイ 次いでオランダ、 彼等のそれとは全く性格の異なる文化の様式を具へた國であ が、 合衆國の國益上の要請を日本に傳達する使節として浦. ロシア、 所謂近代の段階に入つたのは日本の方が西歐世界より イギリス、少しおくれてフランスと修好 一本に入國してきた西 いづれも率直な感嘆と讃美の辭を吝 ルの情報と、 方世 界の 旅 それに十 行者達 以 ツ の比較 後 情 九世 賀 旨

しまなかつた。

只日本は如何にも文明の施設と機構の外形が彼等のそれとはその表現形式を異にしてゐた。どちらかが自分の

仕

明治聖徳記念学会紀要〔復刊第 49 号〕平成 24 年 11 月

文明開化と呼ばれる日本文明の西洋化運動が開始された。 約といふ國際法上の親和關係を承認した以上、日本として受け容れるより他ない實務上の必要事だつた。かうして所謂 を變更して相手のそれに合せ、 少數派といふより孤立の位置に立たされた日本に對して自己變革の要求を突きつけてきた。 相互間の適應を圖る必要があつた。 當然、 西方世界は國際社會といふ多數派の力を背景 それは 旦 修好通

きない苦難の時代でもあつた。その父祖達の苦難の記憶を着實に繼承し、我等自身の記憶として身に帶びておく事が よく堪へ拔いたが故に、 且つ相手の要求を柔軟に受け止め、異質の文明の樣式に自己を合せてゆくといふ、世界史的運命の試練に堪へ拔いた。 つた。日本は明治天皇といふ英明な君主を上に戴いてゐた故に、彼等の優越心に對してよく自己の尊嚴を失ふことなく、 求する際の態度はとかく教師氣取りであり、時に傲岸不遜であり、 する日本が、よく自分を枉げて西方世界の文明の尺度に適應してくれるかどうかを見守つてゐた歳月である。 明治時代とい 西方世界の諸民族は自分達の文明こそが標準であり普遍であるとの驕慢が身に染みついてゐたので、日本に協調を要 ふ約半世紀は、 明治は我等子孫の世代にとつての榮光の時代であると同時に、 外の世界から見れば、自分達よりもはるかに古い民族統一體としての充實した歷史を有 殊に宗教政策面での獨善的姿勢は眼に餘るものがあ 決して輕々に忘却することので

(東京大學名譽教授)

一來の國家經營の指針を樹立するための不可缺の前提である。